発表④

「モンゴル語母語話者に見られる日本語語句の誤表記」

篠原学爾

青年海外協力隊 新モンゴル小中高一貫学校

1. なぜ、どうやって、誤表記を調べ始めたか。

日本語教師であれば、日本語学習者の書いた文字や語句を訂正した経験があるはずです。私は、毎回の授業のあとに宿題のノートを集めて点検しています。だから平日は、ほぼ毎日そういう経験をしています。

毎日のように学習者の書き間違えを直しているうちに、書き間違え方に共通したところや傾向があるのではないか、と思うようになりました。そこで、書き間違えをエクセル文書に記録し始めました。記録が増えてから、それらを比べてみれば、何か分かるだろうと考えたのです。

この発表にあたって、それまでは一人で書き間違えと呼んでいたものを、やや学問的な用語らしく誤表記と表現することにしました。

またこの誤表記を、「意図せずに、ある語句を、一般的に通用している表記とは異なる文字や文字配列で、書き表してしまうこと」、と定義しました。

2. 様々な誤表記

このシンポジウムで発表することが決まった時には、集めた誤表記の事例が 2000 近くになっていました。その中にあった全く同じ事例をなくすと、2000 が 1575 になりました。

それを、特徴に従って 22 種類に分類しました。

その種類とは、①カタカナ語、②類似音の混同、③濁点欠如、④濁点添加、⑤長音欠如、⑥長音添加、⑦促音欠如、⑧促音添加、⑨撥音欠如、⑩撥音添加、⑪拗音欠如、⑫拗音の拡大表記、⑬半濁音欠如、⑭母音欠如、⑮母音添加、⑯連続同音の欠如、⑰連続同音の添加、⑱字形類似、⑲音韻と拍数の習得不完全、⑳既知語句との混同、㉑表記規則の習得不完全、㉒その他、です。

このように分類した 22 種類の誤表記の中から、この発表では、③濁点欠如、④濁点添加、⑱字形類似を取り上げることにしました。全ての種類を分析するためにも、発表を準備するためにも、時間が足りなかったからです。

3. 濁点の誤表記

最初に調べたのは、上に挙げた③と④です。濁点欠如とは、濁点、つまり、ガ行、ザ行、ダ行、バ行の文字に、ついていなければいけない点々が無いことです。例えば、「どうぞ」と書かなければならないのに、「どうそ」と書かれた場合です。濁点添加とは、その点々を、つけないはずの文字につけてしまうことです。例えば、「ほんとう」と書かなければならないのに、「ほんどう」と書かれた場合です。

私が集めた 1575 の誤表記の事例のうちの、339 が濁点欠如、150 が濁点添加でした。全体に占める割合は、濁点欠如が 22 パーセント、濁点添加が 10 パーセントです。二つを合わせると 32 パーセントあり、22 の誤表記の種類の中で最も多くなります。

濁点欠如と濁点添加を合わせた 489 事例を見ていくと、ガ行の誤表記を一つ含むものが 130 事例で 27 パーセント、ダ行の誤表記を一つ含むものが 171 事例で 35 パーセントあることが分かりました。ザ行のものは 74 事例、バ行のものは 73 事例で、それぞれ 15 パーセントずつなので、大きな違いだと思います。

4. 濁点移動現象

一方、濁点の誤表記を二つ含む事例には、一つの語句の中に濁点の欠如と添加の両方を含むものがありました。言いかえれば、一つの文字についていなければならない濁点が、他の文字についてしまっているのです。一例をあげると、「かぞく」、「しごと」と書かなければならないのに、「**が**そく」、「しこ**ど**」と書かれたものです。まるで、濁点が一つの文字から別の文字へと移動したように見えるので、濁点移動と呼ぶことにしました。
濁点移動を含む事例は 31 個で、決して多くはありません。ただ興味ぶかい現象だと思ったので、更に詳しく二点について調べてみました。

まず、ガ行、ザ行、ダ行、バ行のうちの、何行の文字の濁点が何行の文字に移動している場合が多いかを調べましたが、事例の数に際立った違いはありませんでした。次に、濁点の移動の方向について事例の数を数えました。濁点の移動の方向とは、「かぞく」と「がそく」の場合だと「ぞ」の濁点が「が」に移ったように見えるので、左移動、「しごと」と「しこど」の場合で言えば「ご」の濁点が「ど」に移ったと考えて、右移動ということです。しかし、この方向別の事例の数にも大きな差はありませんでした。左移動が 14 で、右移動が 17 だったのです。

今回の調べた結果、濁点の移動について分かったことは、ガザダバ行の、どの文字からどの文字への移動も、同じ多さで起きていることだけでした。

5. 字形類似の注意事例 ～「な」と「た」～

22 の誤表記分類の中からもう一つ取り上げるのが字形類似です。字形類似とは、字の形が似ていることです。例えば、「あ」と「お」や「る」と「ろ」などです。今回は、幾つかある字形類似の事例の中でも、音に似たところがないように思われる「な」と「た」の誤表記について数を調べました。

字形類似に分類した 61 の事例のうち、「な」と「た」の混同は 22 例で、全体の 36 パーセントでした。その 22 例を更に詳しく見ると、「な」を「た」と書いた事例が 15、「た」を「な」と書いた事例が7つありました。一見すると大きな差にも感じられますが、本当にそのような傾向があるかどうかは、もっと多くの事例を集めて確かめる必要がありそうです。

6. 書き間違えの原因は何か

さて、では今回取り上げたような誤表記は、なぜ起きるのでしょうか。まわりのモンゴル人日本語教師の方々にたずねると、濁点の誤表記について興味ぶかい意見を聞かせてもらえました。モンゴル語をキリル文字の筆記体で書く時のやり方が影響しているかもしれない、というものです。
詳しく言うと、一つの字を書き終える時ではなく、一つの単語を書き終える時に、濁点を書いているのではないか、というのです。例えば、「ぼうし」と書く時に、「ほうし」とかいたあとに、「ほ」に濁点をつけるように、です。モンゴル語のキリル文字筆記体では、「оймс」の「й」の上の点は「с」を書いたあとにつけるのではないでしょうか。英語でも、筆記体で little と書く時に、「i」の上の点や、「t」の横の棒を最後に書くことがあるでしょう。

この考えが本当だとすると、我々日本語教師は、いつも濁音の文字を書き間違えている学習者が語句をどのような順番で書いているのか、注意ぶかく観察する必要がありそうです。

7. おわりに ～「しずか」と「ばか」～

「しずか」と「ばか」。印刷された文字を見ているだけでは、お互いに何の関係もなさそうな二つの言葉ですね。ところがこれは、大きな問題を含んでいる誤表記の事例なのです。

今回取り上げた誤表記は、すべて語句についてのものでしたが、誤表記の問題は語句だけの問題ではありません。それを減らす為には、文字の形や傾き、文字と文字との間の距離なども大切であることを、発表の最後に、この「しずか」と「ばか」の事例を見ながら考えてみたいと思います。以上です。